

No.50 ジョゼフ・コースス 「呪文、ノエマのために」 二つのテキスト原文

石牟礼 道子 「椿の海の記」

人の言葉を幾重につないだところで、人間同士の言葉でしかないという最初の認識が来た。草木やけものたちにはそれはおそらく通じない。無花果の実が熟れて地に落ちるさえ、熟しかたに微妙なちがいがあるように、あの深い未分化の世界と呼吸しあったまんま、しつらえられた時間の緯度をすこしずつふみはずし、人間はたったひとりでこの世に生れ落ちて来て、大人になるほどに泣いたり舞うたりする。そのようなものたちをつくり出してくる生命界のみなもとを思っただけでも、言葉でこの世をあらわすことは、千年たっても万年たっても出来そうになかった。

ジェームス・ジョイス 「若い芸術家の肖像」

この映像を思い浮かべて、彼は奇妙な暗い思索の洞窟を垣間見たが、すぐそこから眼をそむけた、まだ、あのなかにはいつてゆくときではない。この友人のものうげな様子は、きちがいなすのように、まわりに希薄な毒気をまきちらすように思われた。そして彼が、次から次に右や左に現れるかりそめの言葉に視線を投げながら歩いてゆくと、それがみなその場限りの意味を失って沈黙し、しまいには下らぬ店看板が彼の心を呪文のように金しぼりにする。そういう死語のうず高い山をよけながら横町を歩いてゆくにつれ、彼は魂が老衰のせいで吐息をつき、萎えてゆくのを、虚ろな驚きの気持ちで見っていた。彼じしんの言葉の意識が脳裡から潮のように退き、言葉そのものに細かい流れとなってしみ入ってくると、言葉はとりとめのないリズムで結び合わされたり、解きはなされたりした。